
また異世界へ

ローズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また異世界へ

【Nコード】

N6288X

【作者名】

ローズ

【あらすじ】

嵐と響也の二人が突然異世界に。

嵐は一度異世界に来た様なことを言っている。響也は異世界に興味津々でちょっと不安。

この世界には魔物いる。そんな中で二人が頑張るといってお話になります。

【面白く読んで頂けるように頑張ります】

プロローグ

「嵐兄ちゃん！」可愛らしい少年が呼んでいる。

「何だ？響也」小さな白い犬を肩に乗せている青年が振り返る。

「ねえねえ、あのお話を聞かせて」小動物のようにこちらを見ている。

「分かったよ。簡単にな」

響也はうんうんと強く頷く。

とある世界では神竜を従える青年と6人の仲間がいました。その世界の人々は攻めてくる魔物と戦っていました。その戦いに休止付を打つため魔物の神【魔神】（堕ちた神）を討ち取るため魔境と呼ばれる場所で死闘を繰り広げました。長い戦いの中、遂に魔王を倒すことができました。その戦いが終わったあと、神竜を従える青年は突然行方を晦ましました。他の仲間達は神から年をとらない魔法を掛けてもらい、この世界を見守る様に言い付けられました。仲間達は青年の遺品を持ってそれぞれの国へ帰っていきました。青年の行方は誰も知らない……

「とつ、こんなもんでいいか？」

「今日のお話はすごく簡略化されましたね」

「こんなんでもいいだろ。おとき話みたいで」

「たまにはいいですね」俺に向かって微笑んでくる。

「じゃあ、特訓をしましょう」響也は走りだす。

「おい。走らなくてもいいだろ」

「嵐お兄ちゃんに追いつきたいから」

「分かったよ」俺も駆け出す。

目的地に着いた俺たちはストレッチを念入りにしていた。特訓と言ってもただの組手だ。俺は白い犬のラウをおろした。

「それじゃ始めるか」

「はい！」

組手は始まった。まずは響也が拳を俺に向けて放つが、俺は避けながらその腕を持ち、地面に軽く叩きつけた。

「はあゝ。やっぱり強いです」

「お前もなかなか良かったと思うぞ」

「そうですか？」響也は照れながら寝転がっている。

「もう一度お願いします」響也が起き上がる。

それから、陽が暮れるまで組手をやっていた。

「はあはあ……。疲れましたね」響也は倒れこんでいる。

「そうだな」と言いながら、息を乱していない嵐を見て響也は「流石です」と思った。

響也が息を整えたのを確認して

「それじゃあ、ぼちぼち帰ろうか？」嵐が尋ねる。ラウが嵐の肩に飛び乗る。

「はい、帰りましょう」

嵐達が立って、家へと帰ろうと横へ並ぶと、その瞬間嵐達の足下が突然光り始めた。

嵐達は驚いていた。そして、そのまま光に飲み込まれた。

1話

「…んう……」響也はゆっくりと目を開けた。

響也の目に映ったのは見たことのない草や木々だった。響也は何が起こったのか、分からなかった。

「ここは……何処だろう……」

響也は嵐がないことに気付き、辺りを見渡した。しかし、あるのは木や草だけ。響也は嵐を見つけるため、歩き始めた。

「嵐兄ちゃん…嵐兄ちゃん…」いくら叫んでも何の反応もなかった。響也はとても不安になった。

「ガサガサ…ガサガサ……」

「！！」後ろの背の高い草を掻き分ける音がした。

「…嵐…兄ちゃん？」響也は恐る恐る後ろを振り返る。

だが、出てきたのは嵐ではなく、人間でもなかった…。そこにいたのは、牙が長く体が赤く虎のような姿を生き物だった。それに虎よりも一回りも二回りも大きかった。

「ガルルウ……ガルルウ…」赤い虎はこちらを今にも、襲おうとしていた。

「……………うう……」響也は逃げたくても逃げられなかった。

突然、赤い虎が飛び掛かった。響也はその勢いで尻餅を着いてしまった。響也は「兄ちゃん！」と目を瞑りながら心の中で叫んだ。

……………。

あれ？と思いながら目を開くと、目の前に大きく開いている虎の口が見えた。

「わっ！」響也は後ろに飛び退いて木に頭をぶつけた。

「痛い……。あれ？僕生きてるの？」

そう考えていると赤い虎は腹の方から血を流しながらドスンと倒れた。

「響也！大丈夫か？」急いで駆け寄って来る嵐が見えた。

「おい！大丈夫か？」嵐は響也の顔を覗いた。

「うん…大丈夫」

「良かった」嵐は胸を撫で下ろした。

「嵐兄ちゃん、あれは何？」

「あれはレッドタイガーと言う魔物だな」

「ま、魔物？」響也はびっくりしている。

「ああ、分かっていると思うがここは俺たちがいた世界ではない。いわゆる…異世界と言う場所だな」

「異世界？」

「いや、信じられないよな…」

「信じるよ！」その言葉に嵐は驚いた。

「そ、そうか」嵐は安堵した表情をした。

「響也。ここはな、俺が話していたあの話なんだよ」

「えっ、ホント？」

「本当だ」

それから、響也にこの異世界のことについて教えた。この世界には沢山の種族が住んでいることや、魔法が存在していることなど。いろいろなことを教えた。

「響也、この世界には沢山の魔物がいる。そのため、自分の身は自分で守らなければならない。だから、お前に身を守る方法を教え

たいと思うのだが？お前は どうする？」

「僕は嵐兄ちゃんのように強くなれるなら教えて下さい！」響也は強く頭を下げた。

「分かった。だが、俺をちよつとばかり厳しぞ」響也は頷いた。

「当分の間は、ここで暮らすことになるが、いいか？」

「はい、嵐兄ちゃんがいるから大丈夫です」

「まあ、危なくなつたらな。まずは、俺が知っている限りの知識を教える」

「まずは、魔物についてだ。魔物には魔獣と聖獣に分けられている。」

「魔物の中で大半は魔獣だ。魔獣は人々に危害を加えてくる。聖獣はこちらからちよつかいを出さなければ、敵対することは無い。例えば、このラウも一応聖獣だ」

「えつ、本当に？」

「ああ、本当だ。神竜と言つて、SSSランクの上のEXの上位に入るな」

「EXランクって何？」

「ん、さっきのレッドタイガーがCランクぐらいだな」

「ラウって、そんなに強いの……」

「ガウガウ」ラウがどうだと言う顔をしている気がした。

「それから……」。

「はあ、やつと終わりました。」響也は仰向けになっていた。
「一通りは教えたと思うから、明日からは魔法などの練習だな」
「分かりました」
「では、食事にするか」

食事はさっきのレッドタイガーの肉や木の実を使った、料理だった。嵐兄ちゃんの料理はとても美味しかった。これから何があるか、ワクワクしている気持ちと不安な気持ちもあるが、嵐兄ちゃんとなら大丈夫な気がする。きっと大丈夫だと、思いながら料理を味わった。

次の日から魔法や獲物の捉え方などを教えた。響也は飲み込みがよく教えがいがあった。数ヶ月経ったくらいから、響也はランクぐらいなら余裕で狩れるようになった。

数ヶ月後、

「さつて、そろそろ街に行こうか」

「はい！」

「いろいろな物を見れるぞ」

嵐たちは、近くの街まで歩き出した。

「俺がいた時から、どのくらい経ったのだろうか」嵐は小声で呟いた。

2話

嵐たちは長い林道を淡々と歩いていった。途中、魔獣が出たが逆に
返り討ちにしていった。たまに、集団で襲ってきたが今の響也では
物足りないくらい強くなっていた。だが、嵐の教えから慢心するこ
となく、日々の修行に精を出していた。

それから程なくして森が開け、高い壁と門が見えた。その門の前
にいる数人の兵士に嵐たちが話しかけた。

「すいません」

「なんだ？」一人の兵士がこちらを向いた。

「私たちはこの街に始めて来たので、いろいろと聞いてもよろし
いでしょうか？」

「ああ、ここはクラリスだ。の六大国の一つのだ」

「そうですか。えっと…物を売りたいのですが、どうすれば良い
でしょうか？」

「それなら市場に行けばいいぞ」

「ありがとうございます。あと、宿は何処でしょうか？」

「それならギルドと割と近く、安い、リーエン亭が良いだろう」

「ありがとうございます」

「それでは、ようこそクラリスへ」嵐たちは兵士に会釈して門を
通った。

嵐たちは素材を売るため、活気が溢れている市場に来た。

「響也、こういう所はいい値段で売れない限り、何度か回って一
番高いところで売るもんだぞ」

「はい、分かりました」響也は嵐の後ろを追いかけていた。

「ここが良さそうだ」嵐は一つの露店に足を運んだ。
「すいません」

「何だ？」男のドアーフが無愛想に応えた。

「これら売りたいたいのですが？」嵐は品を見せた。

「つまらないものは買い取らねーぞ」ドアーフがこっちの品の量を見て驚いた。

「おお、凄い量だな」

「まあ、いろいろと」

「これらはC・Bランクの素材だな」ドアーフがこちらをまじまじと見ている。

「それが何か？」嵐は淡々と言った。

「お前たちのレベルは？」

「レベル？」響也が首を傾けた。

「レベルとはな、ギルドの中で決められる格のことだな。それと、レベルには上からAゝGまである。Aの上にはS・SSなどがある。上のレベル程強い魔物を狩れることになるな」

「そうなんですか」響也は何回も頷いている。

「だから、お前らのレベルは何かと聞いているんだ！」俺たちが無視したように話していたから、怒ってしまったようだ。

「俺たちはギルドすら入っていませんよ」その言葉にそのドアーフは驚いていた。

「で、いくらで買い取ってくれるのでしょうか？」

「ああ、これだけの数なら聖金貨二枚と金貨六枚と銀貨七枚と銅貨九枚と青銅貨五枚でどうだ」

「おお、気前が良いな。もっと、安いかなと思ったぜ」

「まあな。本当にギルドに入っていないのか？」ドアーフは嵐に袋を渡した。

「入ってないませんよ。やっぱり入った方がいいのですか？」嵐は袋の中をよく確認していた。

「まあ、いろいろなサポートが受けられるからな」

「へ」。やっぱりギルドに入ろつか」嵐は考えていた。

「お前達のこと気に入ったぜ。俺の名前はサーガだ。お前らの名前は何？」

「うん、僕は響也。こっちは…」

「アルだ」

「えっ？」

「よろしくな。今後頼むぞ」

「ああ、よろしく。響也、行くぞ」嵐は踵を返して歩き始めた。

響也も慌てて追いかけた。

「何で、偽名を使ったの？」

「この前、説明しただろ？」

「そうだった…。あははは」

「おいおい、頼むぞ」

「分かってるって、兄ちゃん」

嵐は真名を使うと、面倒になるので偽名を使ったのだ。

それから、嵐たちは教えられた、リーエン亭にやって来た。

受付の女性に「すいません」と声を掛けた。

「何でしょう？」その女性は髪が金髪で長く、耳がとんがっていたのでエルフだと響也は思った。

「しばらく、ここで宿を取りたいのですが、部屋は空いていますか？」

「はい、空いています。お二人でよろしいですか？」

「はい」

「お二人ですと、朝と夜の食事付きで、一日当たり銅貨七枚になります。よろしいですか？」

「はい、お願いします」

嵐は紙に名前とサインを書いて、そのエルフに渡した後、金貨二枚と銀貨一枚を渡した。

「では、こちらです」嵐たちはそのエルフについて行った。そのエルフは一つの部屋の前に立つと。

「こちらです」と扉を開いた。

部屋は割と広くて、二つのベッドとイスと一つのテーブルがあった。

「それでは、こちらが鍵です」嵐は鍵を二つ貰った。その一つを響也に渡した。

「何かあったら、このラースにお申し付け下さい。それでは」ラースは扉を閉めた。

「さて、これからどうする？」嵐が響也の方を向いた。

「分かりません」

「じゃあ…響也、学校へ行け」

「えっ」

「一週間後に入試があるらしい。それを受けて来い」

「はっ？嫌ですよ」

「行けよ」

「何で行かなくちゃいけないの？」

「ん？何と無く？…まあ俺はギルドに入ろうと思うがな」

「納得行きませんよ」

「まあ、いいだろ？」

「嫌ですよ」

「お前はまだ、この世界の読み書きが出来ないだろ？」

「嫌です！僕もギルドへ入りたいです」などと議論し合った結果、読み書きが出来るようになったら、ギルドへ入っていいことになったのだった。

2話（後書き）

【 お金について】

青銅貨（十枚） 銅貨（十枚） 銀貨（十枚） 金貨（十枚） 聖
金貨（十枚） 神聖金貨

価値（日本円）

青銅貨・・・約百円
銅貨・・・約千円
銀貨・・・約一万円
金貨・・・約十万円
聖金貨・・・約百万円
神聖金貨・・・一千万円

どのお金も大きさ的には少し小さい。

3話

嵐は虚ろ虚ろとしながらベッドから足を下ろす。そのまま立ち上がって、光が差し込んでいるカーテンを開ける。嵐は太陽の光を全身に浴びて、やっと覚醒した。嵐はテーブルへ向かい、御茶っ葉を急須を入れ、魔法で出した湯を急須に入れた。しばらくして、嵐は茶飲み茶碗に茶を注ぎ、茶を啜る様に飲んだ。

嵐が茶を楽しんでいると、響也が起き上がってこちらに向かって来た。

「響也、起きたか」

「兄ちゃん、やっぱりお爺ちゃんみたいだよ」

「いいんだよ。茶を飲んでいると、心が落ち着く」

「本当にお爺ちゃんだ」

「…響也、今日はどうする？」

「今日は…兄ちゃんは何処へ行くの？」

「そうか、俺は冒険者ギルドへ行くぞ」嵐は少し楽しそうに告げた。

「僕もついて行きます」響也はすかさず言った。

「分かった。今から朝飯食いに行つてからな」

嵐たちは食堂で朝食を食べ終え、リーエン亭を後にした。ギルドは比較的に近かったため、歩いて数十分で着いた。

少し古びた床にカウンターがあり、その手前えにはテーブルがあり、壁際には大きな掲示板があった。中では人で賑わっていた。

「ここがギルド何ですか？」

「そうだ。ここで依頼を受けることができるぞ」

嵐たちはカウンターの方へ歩み寄った。

「すいません。ギルド登録をしたいのですが？」

「はい。では、この用紙に名前などの必要事項を書いて下さい」

嵐は一枚の用紙とペンを渡された。

嵐は黙々と記入した。

名前：アル

年齢：17

職業：魔法剣士・・・属性：水

名前は偽名を使おう。年齢はこのままで。職業は魔法剣士と。属性は全属性使えるが、水だけにしておこう。これでいいよな…。

嵐は用紙を渡した。

「これだけでいいのですか？」

「はい。…では、これに触れて下さい」カウンターに置かれていたのは、一枚の小さな鉄板のような物だった。

嵐はゆっくりと、鉄板に触った。

すると、何かが浮かび上がった。

アル・17歳 職業：魔法剣士

レベルG

と、書かれていた。手を離すと消えた。

「これは？」

「これはですね、特殊な金属で作られた物なんです。これを相手に見せて、確認することができます。その裏には冒険者ギルドの

証が描かれています。無くされると、再発行が必要となります。その場合には、銀貨五枚必要となります」

なるほど、無くさない様にしよう。

「お次は、ギルドの説明をさせて頂きます」

「よろしく願います」

「依頼を受けるには、そちらの掲示板から受ける事ができます」
嵐たちは掲示板の方へ視線を向けた。

「依頼には、レベルが設定されています。もちろん、冒険者様にもあります。レベルは上からS・S・A・B・C・D・F・Gとあります。一部の例外を除いて、最初はレベルGからとなっています」

「それだったら、GレベルはGレベルの依頼しか受ける事が出来ないのですか？」

「いえ、御自身のレベルの二つ程でしたら、受ける事が出来ます。御自身より上のレベルの方と、パーティーを組まれた場合、高レベルの方の二つ程上のレベルでしたら、受ける事が出来ます」

「なるほど」

「それと、レベルを上げるには依頼を受けて一定のポイントを上げる方法と迷宮の魔獣のドロップする魔石を売ることポイントを溜める方法があります。しかし、依頼を達成出来なかった場合、レベルが下がることもあります」

「分かりました」

「分かっているとおもいますが、冒険者への安全性と生死には一切の責任を持ちませんがよろしいですか？」

「はい、分かっています」

「それでは……登録しました。早速ですが、依頼を受けますか？」

「いえ、良いです。今日は迷宮に入ります」

「そうですか。お気を付けて」

嵐たちは踵を返し、ギルドを後にした。

「兄ちゃん。迷宮って何？」

「迷宮はな、神が作ったと、言われている物だ。遺跡みたいな物だな。罾があつたり、強い魔物がいたりするぐらいだな。その代わり、運が良ければ、珍しい物が手に入るらしい」

「依頼は受けないの？」

「ああ、最近の冒険者は迷宮へ良く入るらしい。それに最近はあまり依頼がこないらしいからな」

「そうなんだ。じゃあ、頑張つてね」

「ああ、頑張るよ」嵐は響也に銀貨を五枚渡したて、嵐は迷宮へ向かうため、響也と別れた。

嵐は《ワープ》で部屋に戻り、支度をした。嵐のウエストポーチから日本刀を出現させた。嵐の特殊能力の一つの『創造』だ。想像した物を出現させる能力。もちろん、この魔法のウエストポーチも嵐が作った。このウエストポーチは何でもいれる事が出来る。便利な物だ。

と、いう事で日本刀を持っていこうと刀を腰に下げて行こうと思つたら、一人の白い髪の美少女が立っていた。

「どうした、ラウ？」

嵐はラウに優しく問いかけた。

「えっとね、私も冒険者にならなくなっちゃったの」

ラウは恥ずかしいそうに向いていていた。

「ん？別にいいぞ。でも、早目に言うようにね」

「う、うん！」

ラウは嬉しそうに首を振った。

嵐はラウの冒険者登録をする為にもう一度、ギルドへ向かって、無事に登録した後、嵐はラウと一緒に、始まりの迷宮に向かつて歩き出した。

3 話（後書き）

属性

【四属性】

火・水・風・土

【特殊属性】

光・闇・氷・雷・幻・召

【超特殊魔法】

時・空・重

【特殊能力】

創造など

他にも錬金術などがあります。

魔法を使うには詠唱しなければ、ならない。

特殊能力は詠唱は特に必要無し。

4話

響也は嵐と別れた後、街を回っていた。大通りでは数多くの露店が立ち並び、街の人々はわいわいと賑わっていた。そして、それを見守るように騎士達が街を巡回していた。

「わあー、ゲームでしか見たことないポーションや剣がたくさん売ってある」と響也は少し興奮気味になっていた。そのため、しばらくポーションや剣を見ていた。

「あつ、そういえば本を買わないといけなかった」響也は本屋へ行こうと踵を返し、歩き出したら・・・

・・・ドンツ…ドツサ

横からぶつかられて、地面に尻もちをついてしまった。響也はぶつかられた方を向いていると、数人の人がこちらを見ていた。

そのうちの一人が手を差し伸べて、「大丈夫？」と言った。

「……」響也は驚いていた。そのうちの三人が黒髪で黒い瞳で肌は肌色だった。まさに日本人そのものだった。

響也も日本人だが、今は特殊な指輪のおかげで青い髪に青い瞳に変わっていた。因みに嵐も青に変わっている。

「おい、大丈夫？」と一人の女にじつと見られていた。

「あつ、はい。大丈夫です」と言いながら、手を取って立ち上がった。

「ごめんな」

「いえ、こちらこそ。すみません」

「おいおい、気を付けろよな」後ろの日本人らしき男に注意された。

「す、すみません」響也は頭を下げた。

「君、そんなことしないでいいよ。こんなバカの言うことなんか無視しなさい」三人目の女が二人目の男を挑発していた。

「誰がバカだ！誰が！」

「分からないの？これだからバカは……」三人目の女はやれやれと言った感じで、応えている。

「このような場所で喧嘩なんてやめて下さい！」一人のお付きの女性が二人の中に割って入った。

「ふん」その男女は互いにそっぽを向いた。

「本当、ごめんな」と言って、その団体は去って行った。

その後、響也はその団体についていろいろと聞いて回った。

案外、直ぐに分かった。

彼女らは【天の使い】と言われていて、ここの王族達が数ヶ月前に呼び出したそうだ。今、敵対している国も同じ時期に【天の使い】を呼び出したようだ。それと、その者達は相当強いらしい。今は訓練を行って、戦争に備えているらしい。

ここまでが今、僕が知っていることです。

そして、僕は古本屋で魔物などの図鑑を買った。以外に高かった。この世界では紙は少し高価な様です。

それから、僕は陽が暮れ始めた頃に宿に帰っていた。僕は図鑑を見ながら、字を覚え始めた。こつちの世界に来てから、力が増して、さらに物覚えが良くなった。だから、とても楽だ。

兄ちゃんと修行して、兄ちゃんに少しは近付いたと思って、組み手をしてもらったけど全然、齒が立たなかった。さすが兄ちゃんだなと思いました。

でも、僕の夢は兄ちゃんを超えることだから、これから精進していきたいと思います。

よしっ、晩御飯まで外で体を動かしていきます。

5 話（前書き）

駄文ですが、暖かい目で見てください。

お願いします。

5話

嵐たちは 始まりの迷宮 に潜っていた。

始まりの迷宮 とはその名の通り、駆け出しの冒険者が入る迷宮だ。この迷宮は比較的、弱い魔獣しかいない。だが、三十一階層から魔獣が強くなるので、注意が必要だ。この迷宮を攻略しなければ、冒険者として成功しない。

嵐たちは潜って、一時間で三十一階層まできていた。これは驚くべき早さだ。普通の冒険者なら、一時間で五階層程だ。

嵐たちが急いで来たのは魔獣が強くなる程、魔石の値段とポイントが高くなる為、三十一階層まで来たのだ。これまでの魔獣と同じだが、強さがかなり違った。だが、それは普通の冒険者で、嵐たちにとっては今までと同じように感じていた。

この階層からの冒険者は最低でも四人程のパーティーで行動していた。それに対して嵐たちは二人だったため、他の冒険者からは「無謀だな」などと、言われたが嵐たちは気にしてはいなかった。

嵐たちはゴブリンやキラーバットなどの魔獣を大量に倒していた。その数は千にも達しようとしていた。

そのようにして、最下層の五十階層までやって来た。

「やはり、弱かったな」

嵐は退屈そうにしていた。

「アラッ…じゃなくて、アルにとってはそうですね」

「他の駆け出しの冒険者の前で言ったら、睨まれそうだな」

などと、言っているうちに大きな広場が見えた。近付いて行くと、中心に大きなスライムが現れた。

「スライムキングか…」

そう呟いた後、嵐たちは武器を構える。嵐は二メートル程の刀でラウは二本のダガーを持って、構えている。

そして、スライムキングに向かって駆け出した。まずは、ラウが攻撃を繰り出した。スライムキングが繰り出す触手を全て、切り刻んでいる。そうして、後ろから嵐が跳びながら、スライムキングの核を真つ二つに切り裂いた。

核が真つ二つになったと同時にスライムキングの体が溶けて、魔石と何かの塊があった。

ラウは拾い上げた塊をジロジロと見ていた。

「アラシ、これは何だろう？」

ラウは塊を見せてきた。

「それはミスリルだな」

「へー、これがミスリルかあ」

「それじゃあ、帰ろう」

嵐たちは魔法陣に乗って、迷宮の入口に戻った。

それから、迷宮の前にいるギルドの人達に挨拶をして、魔石などを売るためにギルドへ向かった。

嵐たちはギルドの中へ入った。

そして、登録して貰った、ギルドの女性のところへ向かった。

「すいません」

「はい、何でしょうか？」

変わらない、営業スマイルで挨拶された。

「魔石を換金してもらいたいのですが」

「はい、大丈夫ですよ」

嵐は魔石の入った袋を渡した。

「沢山、取られましたね」

女性は驚いていた。はっ、と思い出したように「暫くお待ち下さい」と言って、奥の部屋に入って行った。

そして、十五分程経って、袋を持って戻ってきた。

「大変、申し訳ありません」

と深々と頭を下げられた。

「気にしてませんから、えっと……「アリアです」アリアさん大丈夫ですよ」

「ありがとうございます」

アリアさんは少し頭を下げた。

「それでは、今回は黒魔石が82個と青魔石が24個と黄魔石が一個なので金貨一枚と銀貨一枚と銅貨五枚です。後、今回の魔石でGレベルからFレベルになりましたのでカードの方もご確認下さい」嵐はアリアから渡された袋とギルドカードをよく見た。

「確かに」

そう言って、ギルドを出た。

そのまま、宿に帰って恭弥と少し組み手をして黒髪・黒い瞳の少女たちの話をして、一日を終えたのだった。

5 話（後書き）

黒＜青＜緑＜黄＜赤＜白＜金

魔石

黒魔石・・・青銅貨五枚

青魔石・・・銅貨一枚

緑魔石・・・銅貨五枚

黄魔石・・・銀貨五枚

赤魔石・・・金貨一枚

白魔石・・・金貨五枚

金魔石・・・聖金貨一枚

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6288x/>

また異世界へ

2011年11月24日01時50分発行